

令和 3 年 5 月 27 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02501

研究課題名(和文) ジョン・ディーが17世紀英国のアンティークエリアニズムに及ぼした影響の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Research on the Influence of John Dee upon 17th-Century British Antiquarianism

研究代表者

横山 茂雄 (YOKOYAMA, SHIGEO)

奈良女子大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：10144726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、16世紀英国の学者ジョン・ディーが17世紀英国のアンティークエリアニズムに及ぼした影響を考察することを目的とする。代表的なアンティークエリアンの一人で近代考古学の基礎を築き、王立協会のメンバーでもあったジョン・オーブリの場合、占星術研究および普遍言語創出の分野でも熱心な活動を行っており、彼がディーに強い関心を抱き続けたのは、その双方の分野の先達としてディーを重視していたためだという可能性が高いことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代の学問諸分野の基礎、萌芽となった17世紀英国のアンティークエリアニズムの全容、詳細に関しては、たとえばジョン・オーブリの著作群の厳密な翻字校訂版がまだ出揃わない事実に端的に見られるように、十全な研究が進捗しているとは言いがたい状況にあるが、16世紀のジョン・ディーが及ぼした影響に焦点を絞り、オーブリの王立協会における普遍言語に関する活動なども視野に入れて調査分析した本研究は、その欠を補うものである。

研究成果の概要(英文)：This study aims at analyzing the influence exerted by an 16th-century British scholar John Dee upon 17th-century British antiquarianism. John Aubrey, one of the famous antiquarians, who was a pioneer of modern archaeology as well as a member of The Royal Society of London for Improving Natural Knowledge, also devoted himself to investigating astrology and the possibility of universal language: his acute interest in Dee might have arisen from his view of Dee as a great master of astrology and an important precursor in the field of universal language.

研究分野：英文学

キーワード：ジョン・ディー アンティークエリアニズム 17世紀英国 ジョン・オーブリ トマス・フラウ 占星術 普遍言語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者は、2009-2011年及び2012-14年にかけて、それぞれ、科学研究費補助金の基盤研究(C)「ジョン・ディーの一次資料の基礎的研究」(課題番号21520253)と「ジョン・ディーの一次資料の発展的研究」(課題番号24520288)によって、英国エリザベス朝の学者ジョン・ディー(1527-1608)の遺した魔術作業記録の手稿の調査、分析をおこない、その成果の一部を単著『神の聖なる天使たち ジョン・ディーの精霊召喚一五七一〜一六〇七——』(研究社、2016、総446頁)として公刊した。

(2)『神の聖なる天使たち』はディーの多年にわたる魔術活動に関する本邦初のまとまった研究書として高い評価を得たが、本研究は、その成果を踏まえて、ジョン・ディーが17世紀英国のアンティークエリアニズム(antiquarianism)に及ぼした影響を解明するものとして着想、企図された。

2. 研究の目的

(1)「尚古趣味」、「古物収集」などと訳されることもあるアンティークエリアニズムだが、イライアス・アシュモール Elias Ashmole (1617-92) やジョン・オーブリ John Aubrey (1626-97) といった17世紀英国の代表的なアンティークエリアン(antiquarian)の例に明らかなように、近代の学問諸分野の基礎、萌芽をなしており、その訳語では不十分、不適切だといえよう。たとえば、王立協会(The Royal Society of London for Improving Natural Knowledge)のメンバーとしても活躍したオーブリは、考古学の元祖的存在であるだけでなく、自然哲学=自然科学(natural philosophy)の広範な範囲に関心を有していた。

(2)一方、とりわけメリック・カソーボン Meric Casaubon (1599-1671)の編集した『多年に亙ってジョン・ディー博士と精霊の間に起こったことの真正にして忠実な記録』(*A True and Faithful Relation of What Passed for Many Years between Dr. John Dee and Some Spirits*)

以下、同書を『精霊記録』と略記の刊行(1659)以降は、ディーを邪霊と接触した魔術師、迷妄の犠牲者、悪質な詐欺師としてみなす否定的観点が英国では多数派となったが、トマス・フラー Thomas Fuller (1608-61) やオーブリ、アシュモールといったアンティークエリアンたちは、ディーに強い関心を持ち続け、高い評価を与えた。

(3)ディーに対するこのようなアンティークエリアンの姿勢、特にアシュモールとトマス・ブラウン Thomas Browne(1605-82)に関しては『神の聖なる天使たち』で既に記述したところであるが、本研究ではオーブリやフラーなどをさらに詳しく解析して、王立協会の活動も視野に入れつつ、17世紀英国のアンティークエリアニズムの本質の一端を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)フラー、ジョン・ウィルキンズ、フランシス・ロドウィックなどの著作については、従来からの刊本を用いるが、オーブリの*Brief Lives*については最新の翻字校訂版*Brief Lives with an Apparatus for the Lives of our English Mathematical Writers*, ed. Kate Bennett [(2015, repr. with corrections, Oxford: Oxford University Press, 2016)], 2 vols.に依拠する。

(2)普遍言語関連については、近年の研究書、James Douglas Fleming, *The Mirror of Information in Early Modern England: John Wilkins and the Universal Character* (n.p.: Palgrave Macmillan, 2017)、Rhodri Lewis, *Language, Mind and Nature: Artificial Languages in England from Bacon to Locke* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007)、David Cram and Jaap Maat, 'Introduction' to *George Dalgarno on Universal Language* (Oxford: Oxford University Press, 2001)などにおける成果を参照する。

4. 研究成果

(1)トマス・フラーの死後に刊行された『イングランド名士録』*The History of the Worthies of England* (1662)は、地誌と人物伝が混淆した形式をとっており、同書は、アンティークエリアニズム及び英国伝記文学の双方の観点から、オーブリの『名士小伝』*Brief Lives*に先行する重要な著作である。同書において、フラーはジョン・ディーを傑出した数学者、占星学者と評価し、魔術に長じていた点についても「正当な自然哲学」の範囲だと擁護している。また、ディーの協力者でエドワード・ケリー Edward Kelley (1555-98?)についても、優秀な錬金術師だったと判定する。妖術師としてしばしば非難されたディー、詐欺師と広くみなされていたケリーに対して、イングランドの内戦、内乱期を王党派の聖職者として生き抜いたフラーがこのような評価を下せた理由、背景については、カソーボンとの比較も含めて、今後さらなる考究の余地がある。

(2)『イングランド名士録』におけるディーとケリーの項目の執筆にあたって、フラーは、ジョン・ウィーヴァー John Weever (1576-1632)の『古代墳墓論』*Ancient Funeral Monuments*

(1631) アシュモールの『英国の化学の劇場』*Theatrum Chemicum Britannicum* (1652) を参照しつつ、精霊召喚作業を詳細に記録したディーの手稿(トマス・コットン Thomas Cotton [1594-1662] 所蔵分) に丁寧に目を通している。この事実は、如何にフラーがディーとケリーの事蹟に強い関心を抱いていたかを証明するものといえる。フラーがディーとケリーについての箇所を執筆した時期は、『精霊記録』(1659) の刊行以前であった点も重要である。

(3) ジョン・オーブリの活動の全貌、詳細については、科学史家マイクル・ハンター Michael Hunter による先駆的著作『ジョン・オーブリと学問の領域』*John Aubrey and the Realm of Learning* (1975) が40年以上前にその大まかな見取り図を描いたにもかかわらず、依然として明らかになっていない部分が多い。その理由の一つはオーブリの著作の多くが信頼できる版で提供されていながらであり、Stonehenge や Avebury などの古代の巨石遺跡を綿密な実地調査に基づいて初めて論じた主著『英国の遺跡』*Monumenta Britannica* ですら、十全な翻字校訂を施したテキストはいまだ出現していない。最も広く読まれている『名士小伝』については、完全な翻字校訂版がようやく数年前に刊行され (*Brief Lives with an Apparatus for the Lives of our English Mathematical Writers*, ed. Kate Bennett [2015, repr. with corrections, Oxford: Oxford University Press, 2016], 2 vols.) これによって、同書がいかなる意図に基づいて執筆されたのかが初めて明確に理解できるようになった。すなわち、「尚古趣味」の典型と見なされてきた『名士小伝』の執筆の動機となったのは、実は占星術の研究であった。したがって、オーブリがディーに強い関心を抱いた理由のひとつは、ディーを占星術の偉大な先達と考えたからであるという可能性が高い。なお、『名士小伝』が占星術の正当性を検証するデータベースとして企図された点はきわめて重要であり、方法論としては、オーブリは明らかに近代自然科学のそれを採用していたといえる。

(4) 1660年にロンドンで設立された王立協会は、西欧近代における自然科学の発展に大きな寄与をなした組織であるが、オーブリは1663年に会員となり積極的な活動をおこなった。しかしながら、オーブリは科学には無知な素人だったという従前の見解はいまだ完全に払拭されているとは言い難く、一方、オーブリの貢献の詳細も解明されていない点が多い。その一つに普遍言語 (universal language) をめぐる問題がある。世界を正確に記述でき、かつ、万人が共有できる普遍言語の創出は、王立協会草創期において重要かつ喫緊の課題として会員間で認識されており、オーブリ自身はこのことに深く関わったと自負している。

(5) 協会初期の中心人物のひとりジョン・ウィルキンズ John Wilkins (1614-72) は、普遍言語に早い時期から取り組んでいた。彼は1641年刊行の『メルクリウス、あるいは秘密の迅速な使者』*Mercury, or the Secret and Swift Messenger* (1641) で普遍言語の創出の必要性を訴え、1668年には『真正の文字と哲学的言語に向けての試論』*Essay Towards a Real Character, and a Philosophical Language* で人工的普遍言語の具体案を提唱した。他方、フランシス・ロドウィック Francis Lodwick (1619-94) も早い時期に『共通の書法』*A Common Writing* (1647)、『新たな完全な言語構築のために敷かれた土台あるいは基礎』*The Ground-Work or Foundation Laid (or so intended) for the Framing of a New Perfect Language* (1652) を刊行して、協会の会員となる人々の注目を既に集めていた。オーブリが大きな役割を果たしたのは、この問題についての王立協会内外の情報を収集、交換、伝播した点であった。

(6) 普遍言語をめぐる議論でたびたび話題となるのは原言語、始原の言語という概念だが、ディーが天使から開示された、聖なる神の言語、エノク語こそまさにその原言語に他ならなかった。さらに、ディーは暗号を熱心に研究したばかりか、エノク語じたいが暗号体系ともいえるが、普遍言語と暗号も密接な関係を有していた。たとえば、ウィルキンズの『メルクリウス』はそもそも暗号論の書物であり、やはり王立協会員で「フックの法則」で名高い Robert Hooke (1635-1703) は、その著書『太陽観測望遠鏡、その他の器具の解説』*A Description of Helioscopes and Some Other Instruments* (1676) において、ウィルキンズの創出した普遍文字を自分の発明を秘匿する暗号として使っていた。したがって、オーブリがディーに強い関心を抱いた理由としては、占星術研究のみならず普遍言語創出の観点も存在していた可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 横山茂雄	4. 巻 52
2. 論文標題 偽書考 あるいは欲望の実体化について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 111-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横山茂雄
2. 発表標題 17世紀英国におけるジョン・ディーの評価
3. 学会等名 日本英文学会関西支部第13 回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------